

日本の戦闘者



荒谷 卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。
海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊―最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房／『日本の特殊部隊をつくったふたりの“異端”自衛官―一人は何のために戦うのか！―』ワニプラス
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

086

先号でも紹介した橋本佐内は、20歳の時（1856年）すでに「今の日本は力不足で、今のうちにしかるべき国と同盟国の関係になっておくのが得策でしょう。その場合、英国とロシアは利害の対立する強国で並び立つことはできません。是非ともロシアと同盟するべきと考えます。なぜなら、ロシアは信義のある国であり、国境を隣接し唇齒のように利害関係の密接な国であるから、我が国から和親を申し出ればロシアはありがたく思うでしょう」との考えを述べていたわけだが、これなぞは、すでにして地政学的見識を持って、日本の針路を見据えていたということだ。一般的に、地政学の祖と呼ばれているイギリスのハルフォード・J・マッキンダーが地政学的考えをまとめたのが1990年代初頭だから、鎖国をしていた江戸時代にあっても、日本には国際政治に関する高い見識を持つ若者が多く存在していたわけだ。しかも、マッキンダーは、「デモクラシーの理想と現実」という著書の中で「すでに国際的にみて英国のシー・パワーに挑戦できるものではなく、英国から世界の岬の先端にある喜望峰を経て日本に至るまでの海上ルートは、ことごとくその支配下にある。したがって、この海上を走る商船は大英帝国の領土の一部であり、また諸外国に投下された資本は英国の資産の一部として、ロンドンのシティ（金融街）の支配を受け、その世界にわたるシー・パワーの維持に役立たれた。島国である英国が海洋を支配するのは、とどのつまり大自然の秩序の一部ではないかと考えられた」と言っているように、彼の地政学的背景にある思想が、絵にかいたような帝国主義に裏付けられており、「英国ではなくロシアと同盟するべき」とする佐内の洞察には感服せざるを得ない。

このマッキンダーは、英国は海洋を支配するだけでなく大陸もすべて支配するべきであるとし、『ハートランド（ユーラシア大陸）を支配するものが世界を制す』というアングロサクソンの帝国主義理論を展開していく。これを地政学とよぶようになっていくわけだ。英国の衰退により、帝国主義的世界支配を引き継いだのが米国だ。米国のニコラス・スパイクマンという地政学者が、マッキンダーのハートランド理論をさらに先鋭化し『リムランドを支配す

るものが世界を支配する』として、米国のモンロー主義（不干渉政策）を非難し放棄させた。リムランドとは、ロシアを取り巻く中国（J・ケナンは日本とした）、インド、イラン、東欧諸国等だ（図参照）。このリムランド諸国の連携を分断し、米国の影響下に置き、ロシアとは連携させないという考えであり、いわゆる対ソ（対露）封じ込め政策となって実現する。冷戦構造は、こうした英米の戦略によって作られた構造であり、ソ連が鉄のカーテンを引いたのではない。歴史は、戦前までさかのぼるが、「俺のものは当然俺のもの。人のもの俺が欲しいと思ったら俺のもの」という米英の帝国主義的アジア政策に対し、異を唱え戦いを挑んだのが日本である。戦前の日本の対英米認識を紹介しよう。「そもそも世界各国がそれぞれその所得、互いに頼り合い助け合ってすべての国家がともに栄える喜びをともにすることは、世界平和確立の根本です。しかし米英は、自国の繁栄のためには、他の国や民族を抑圧し、特に大東亜に対しては飽くなき侵略と搾取を行い、大東亜を隷属化する野望をむきだしにし、ついには大東亜の安定を根底から覆（くつ）がえ）そうとしました。大東亜戦争の原因はここにあります。大東亜の各国は、互いに提携して大東亜戦争を戦い抜き、大東亜諸国を米英の手かせ足かせから解放し、その自存自衛を確保し、次の綱領にもとづいて大東亜を建設し、これによって世界の平和の確立に寄与することを期待しています」。これが、日本、中国（南京国民党政府）、タイ、ビルマ、インド、フィリピン、満州が共同で打ち立てた「大東亜共同宣言」である。そして5つの原則が謳われた。

第一「共存共栄の原則」。大東亜の各国は、地理的、経済的、物価的必然から言って、その固有の理念からすれば共存共栄の実を挙げるべきはずであった。しかし、米英の毒手により大東亜を個々に分割し、長く横の連絡を取れぬようにし、米英のあらゆる妨害にもかかわらず我が国が強大となるや、大東亜の諸国をしてわが国を憎悪、敵対せしめる如く仕向けた。

これに対し、日本は、植民地から解放した大東亜の国々とともに、米英のような利己独断的のものではなく、大東亜固有の道義に基づいた共存共栄、

相互共済の本義による秩序を打ち立てようというのである。

第二「独立親和の原則」。米英は、日本の孤立を企んで、彼らの最も恐れる日支の結合を極力破壊せんとした。そこで、第一に日支の離間の為排日運動の扇動拡大に狂奔した。第二に日支衝突に向け蒋介石の排日運動にあらゆる援助と便宜を与え抗日運動にまで推し進め支那事変を勃発させた。第三に支那事変を拡大永続させ日本の国力を消耗させるとともに、支那を破壊し米英の力に依存させることによって自らの野望を達せんとした。

隣保親和の為には、大東亜の国々が相互にその自主独立を尊重しなければならない。大東亜戦争により、米英が独立を奪い利己的搾取の犠牲とした諸国を解放し、弱小国を軽蔑し劣等視する態度を改め、相互の間に聊かの軽蔑も追従もないおのづかなる親和を基調とする新しい世界を生もうというのである。

第三「文化高揚の原則」。米英は、その経済的侵略手段として先ず文化侵略を行い、自国流の文化を強制してその国の伝統文化を失わせ、ひたすら従順性と隷属性を養い、その国民を去勢しようと試みた。

世界人類の文化は絶えず向上しなければならない。一国の文化が全国民の特性発揮によって合成されるように、人類文化の向上進歩は世界各国文化の合流によって起こるものである。政治・経済が独立してもその固有の文化が確立されない以上完全なる独立とは言えない。大東亜各国から米英文化の残骸を払拭し固有文化を創造発展することにより、大東亜の文化は世界文化の進歩に寄与するに至るのである。

第四「経済繁栄の原則」。米英資本主義の支配下では、その国の経済機構は米英の市場たるに好都合ように造られ、一方では米英に必要な原料の清算のみを旨とし、他方では総ての生活必需品が米英の監督下に置かれるという風に仕組まれ、生存のためには米英への従属を余儀なくされてきた。

大東亜の互惠の交易は、米英の利己独占的貿易とは本質的に異なる。いずれの国にも、地理的気候的特性や鉱物資源等天恵的に決定されたものもあり、国民の技術や文化経験から生まれた特性など、自然夫々の経済的特性があら

われ、有無相通ずることによって各国民の生活内容を向上せしめ得るのである。互惠の下における交易は、相互国民の生活を等しく安全幸福にする有無相通の原則の下に行われ、安居楽業の楽天地を実現するとともに、各国は各々の特性を発揮して経済の発展を図り大東亜の繁栄を相共に増進していこうというのである。

第五「世界進運貢献の原則」。米英を主とする白人の優越感と偏見は人道に許すべからざる悪虐である。大東亜の結合は、隣伍部落より郷村郡県へと進んでいくように自然発展の順序として世界の共存共栄への一単位としての結合であって、米英のように世界資源の大部分を領有しながら利己的ブロックを造る排他的のとは異なる。

大東亜戦争の目的は、単に米英の不義を正すというのではなく、世界に新しい秩序を建設するにある。人類の秩序は、古来幾度か新陳代謝されてきたが、人類は原始以来の秩序をすべて受け継いでその総和によって発達するものである。世界の秩序を発展向上するためには二つの要素が必要である。一つは、現代の秩序を十分租借しえる能力のあることである。もう一つは、反省と温故知新の実行力を持っていることである。日本は欧米秩序をほとんど学びつくした。支那、印度、その他東亜諸国は長い歴史を有す。特に日本は建国以来一貫した伝統と精神と秩序を持っている。大東亜が新秩序を掲げ世界の進運に貢献する時が来たのである。

そして、次のような対英米認識を示

した。「日本の秩序は家族的秩序であって、家の延長に国家があり、家族を拡大したのが日本民族である。この和の心は受容の性質を帯び排他性を持たない。ゆえに、家の幸福な生活と豊かさを東亜の国々に広め、世界に広めることを是とする。これに対し、米英の家庭に対する観念がそうである如く世界観においても家族的秩序を全面否定する。彼らの為すところを放置しておいては我々の家庭の秩序そのものを破壊される。我々は、家族的秩序を破壊せんとする米英を徹底的に破砕し彼らの思想を絶滅せねばならぬ。彼らに対しては和の精神の甘さに陥らず、米英を撃滅し世界に家の秩序を広めるのが使命である」。

戦前、日本が目指したのは、「各国の政体は各国の扱ふところを尊重し差別や干渉をしない地域的共存圏を確立する諸共存圏の相互の協和関係に基づく新たな世界秩序」であった。そして、それを国民一丸となって行動できたのは、「人間は、宇宙・自然の道理に生命活動を帰一すれば天壤無窮に栄え、反すれば消滅する。人間が存続するには、天道を全うする以外に道はない。日本の秩序は天道による。日本人は、自らの生命を天道に帰一し永遠の生命たるを自覚して力を尽くすことをよしとする。正義を全うするにはこれを実行する信念と気魄が必要である。あらゆる障害を破砕して、健全なる正義の秩序をこの世に実現する。日本人は、万難不屈の大和魂で正しき世を目指して力を尽くすのみ」。という信念と気迫であった。



スパイクマン（米）の地政学

国家はパワーポリティクスに専念すべき。ハートランドの拡大を防ぐためにはリムランドへの介入が不可欠である。スパイクマンのこの主張は、アメリカが戦後、孤立主義から、封じ込め政策に代表される介入主義へと、政策の舵を切る理論的基盤となった。

087